



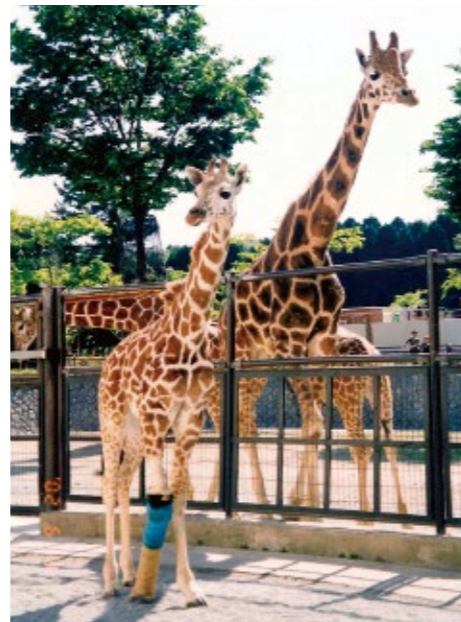
チンパンジーのコブヘイと両親

ふれあいランド
オープン

30周年記念式典

青空シンポジウム

イヌワシの自然繁殖に成功



たいようとジュン



たいようおわかれ会

全国が注目した 義足のキリン「たいよう」。 1994-2003

1994年、ホンドテンの繁殖に成功しました。また翌年にはアネハヅルの人工授精による繁殖にも成功、日本動物園水族館協会から国内動物園で初めての繁殖に与えられる「繁殖賞」を受賞しました。1974年のニホンアナグマ、1978年のメンフクロウ、1990年のジャッカルの繁殖賞に加えて合計5つの受賞となりました。

1996年に生まれたチンパンジーのオス赤ちゃんは、母親のお乳がでなかったこともあり、人の手で育てられました。群れでの社会生活ができるようにと、両親や他のチンパンジーとの接触を密にしたこともあって後に群れに戻ることができ、その後野毛山動物園に移動し父親となりました。

1997年、小動物とのふれあいを目的とした「ふれあいランド」が整備されました。施設にはカピバラ、ペンギン、レッサーパンダ等の野生動物も配置され、なかよしタイムを含め、現在の人気スポットができあがったのもこの時期でした。

1991年に導入したオスキリンの死亡を受け、キリンの種保存を目指すため、1998年、大分の九州自然動物公園からオス・ジュンが陸路約1,700キロを移動し来園しました。ジ

ュンは、その後13年間で後述の「義足のキリン たいよう」を含め、5頭の繁殖に関わりました。

2000年、古くなった猛獣舎改修計画が始まり、2002年にチンパンジーの新しい展示施設「チンパンジーの森」がオープン、ガラス展示ではチンパンジーがお客さまを観察する様子も見られました。

同年、義足のキリン「たいよう」が大きな反響を呼びました。残念ながら闘病3ヶ月で亡くなりましたが、全国からたくさんのお励みメールや手紙が寄せられました。リピーター確保を目指して年間利用券(通称パスポート)の発売を開始したのもこの年でした。

2003年、開園当初からあった半円形の猛獣舎、総合動物舎を改修した新猛獣舎「王者の森」が完成し、開園30周年の記念式典と合わせてお披露目されました。同日、子どもたちが未来の動物園を語る「青空シンポジウム」も開催されました。この年、飼育開始から33年目で初めてイヌワシの自然繁殖に成功し、さらに園内の沼で絶滅危惧種のゼニタゴが確認されるなど希少動物にも注目が集まりました。

2004年、新しくできた「王者の森」の新クマ舎でツキノワグマが繁殖、またフンボルトペンギンが複数のペアで繁殖に成功するなど、地道な取り組みの成果が現れた年になりました。

2005年には、動物関連サービス「動物のお食事拝見」を「まんまタイム」として、さらにこの頃から少しずつ「エサやり体験」も加え、飼育員がつくる独自のソフトサービスを常設のイベントにするなど、体験型で楽しむ動物園づくりに努めました。また、この年には、大森山動物園の位置づけや役割、あり方を見つめ直そうと9月に「こどもシンポジウム」を、11月には一般市民を対象にした「明日の大森山動物園を考えるシンポジウム」などが開催され、やがて「大森山動物園条例」の制定へとつながり、翌2006年1月1日から条例が施行されました。この条例を受け、この年の冬から正式な

冬期開園が始まったほか、公募により愛称が「ミルヴェ」に決定しました。

同年、大森山動物園独自のイヌワシ繁殖技術「ローテーション式育雛」を考案、3羽のヒナが巣立ちに成功しました。

この頃、基盤施設改修計画が始まり、2007年には管理事務所と研修ホールを兼ねた施設「ミルヴェ館」、2008年には新動物病院「森のびょういん」、2009年には、財団法人日本宝くじ協会の寄贈による大型遊具「アソヴェの森」がオープン、さらにこの年、将来の動物園と大森山公園の再編整備のための「大森山自然動物公園整備構想」が有識者を含む市民委員でつくられ、2010年に発表されました。飼育職員発案の「アニマル戦隊ミルヴェンジャー7」が誕生したのもこの年で、ステージショーなどでイベントを盛り上げました。

2004-2010 イベントや遊具など 新しい魅力が続々誕生。



まんまタイム



こどもシンポジウム



明日の大森山動物園を考えるシンポジウム



ヒツジのエサやり体験



ミルヴェ館オープン



アソヴェの森



ミルヴェンジャー7



森のびょういん竣工式